



大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 3450号 2017.1.9 発行



障害者の成人を励まし祝う会 「社会の扉たたきたい」 家族や恩師らが祝福 富山 /富山 毎日新聞 2017年1月8日
手話通訳も交えて20歳の決意を述べる杉森遥華さん(右) =富山市牛島町のカナルパークホテル富山で、青山郁子撮影

「第37回障害者の成人を励まし祝う会」が7日、富山市牛島町のカナルパークホテル富山で開かれた。晴れの門出を迎えた新成人75人が家族や恩師らから祝福を受けた。国際障害者年の1981年、成人式参加を望む重度障害者の訴えに応え、県障害者(児)団体連絡協議会が全国に先駆けて開催した。

仙台で障害者の新成人を祝う会

河北新報 2017年1月8日



晴れ着をまとして出席した新成人

知的に障害がある人の「成人を祝う会」が7日、仙台市宮城野区の仙台サンプラザホテルで開かれた。市内の新成人12人が出席し、家族や福祉関係者の祝福を受けた。

主催した社会福祉法人「仙台市手をつなぐ育成会」の千葉厚子理事長が「夢を実現するには地道な積み重ねが大切。努力して壁を乗り越えていってほしい」と励ましの言葉を贈り、記念品のネクタイピンとネックレスを新成人に手渡した。

新成人を代表して青葉区の高齢者福祉施設で働く小林聖(ひじり)さん(19)が「今の仕事を何十年と続け、20年間育ててくれた両親に孝行したい」とあいさつした。

成人を祝う会は今年で52回目。歌手さとう宗幸さんも駆け付け、「青葉城恋唄」など3曲を歌って二十歳の門出を祝った。

性暴力 当事者と記者が協議 被害の実態、伝え方指針公表 毎日新聞 2017年1月9日



真剣な表情で話し合う山本潤さん(右)ら「性暴力と報道対話の会」のメンバー=東京都渋谷区で2016年12月14日

性暴力の被害に遭った人たち取材する報道関係者が気をつけるべきこと、逆に当事者が取材を受けるときに知っておくとよいことをまとめた小冊子ができあがった。報道関係者と当事者が話し合っまとめたもので、インターネット上に公開され、誰でも読むことができる。実態をきちんと伝える

ことで、性暴力被害をなくそうという願いが込められている。【本橋由紀】

児相増設へ支援マニュアル 厚労省、自治体向けに

共同通信 2017年1月8日

増加の一途をたどる児童虐待への対応強化を図る厚生労働省が、児童相談所開設に必要な手続きなどを示した自治体向けの支援マニュアル作成を進めていることが8日までに分かった。

児相は都道府県と政令市に設置が義務化されているが、設置が認められている中核市(47市)では金沢市と神奈川県横須賀市しか置いていない。法改正で4月以降は東京23区も設置可能になり、国として増設をサポートする構えだ。

児相を巡っては、2015年度に対応した児童虐待が10万件を超え、職員らの過重な負担解消が課題となっている。現在は全国に210カ所設置され、国はよりきめ細やかな対応を進めるため、今後5年間をめどに中核市や東京23区への整備を支援する方針を打ち出している。

ただ04年の児童福祉法改正で設置可能になった、人口20万人以上が要件の中核市では新設の動きが広がっていないのが現状。専門知識を持つ人材の確保が難しい上、既に設置している金沢市や横須賀市などからは「開設に向けた具体的な事務作業が分からず苦労した」との声も出ていた。

厚労省によると、開設マニュアルは春までに作成する予定。この数年間に児相を設置した自治体の職員らにヒアリングをし(1)開設までのスケジュール(2)都道府県との調整事項(3)設置後に必要な人員などの態勢(4)運営にかかる経費——などを盛り込むという。

一方、厚労省はマニュアルとは別に、児相開設を目指す自治体への児相OB配置や、準備に関わる職員採用に対する補助金創設を来年度予算に盛り込んだ。また都道府県に対しては、児相開設を目指す自治体の職員研修などへの協力を呼び掛ける予定だ。

厚労省によると、全国の児相が対応した児童虐待の件数は1999年度に1万件超、10年度には5万件超となり、15年度は過去最多の10万3286件だった。昨年5月、児相の体制や権限を強める改正児童福祉法などが成立。一部が同10月に施行された。

社説：スマホ世代の新成人 手中の「利器」が時代開く 朝日新聞 2017年1月9日

きょうは成人の日。123万人が大人の仲間入りをする。

若者をとりまく状況は決して明るくはない。少子高齢・人口減少社会の到来で、将来の負担は重くなる一方だ。息苦しさを感ぜ、先行きに不安を抱く人、自らの無力にいらだちを覚える人も多いかもしれない。

だが、若い世代が秘める大きなパワーと可能性を実感させられる出来事が昨年あった。

アニメ「君の名は。」の大ヒットだ。興行収入は200億円を超え、邦画では宮崎駿監督の「千と千尋の神隠し」に次ぐ。

立役者になったのは、スマートフォンという小さな「利器」を手に握り、それを自在に使いこなす若者たちだ。

公開直後からLINEやツイッターなどのSNSに多くの感想を発信した。共感をもとにした小さなつながりがあちこちに生まれ、映画のモデルの地を訪れる「聖地巡礼」も盛んになった。それらが結びつくことで、大きなうねりを生み出した。

作品の魅力や製作・配給側の巧みな戦略もあった。だが新海誠監督の前作の興収は1億5千万円。新作が大化けし、社会現象にまでなったのは、ネットと若者の存在抜きに語れない。

■ヒットの鍵を握る

スマホの小さな画面と文化・娯楽との融合は、新たな行動様式も生んでいる。

「ポケモンGO」は、街を歩きながらキャラクターを探し、つかまえるゲームだ。位置情報を使い、現実の風景の中で遊べるようにしたのがミソだ。

部屋でパソコンに向き合っていた時代と違い、手軽なスマホならば、リアルな世界で実際に体験したり他者とふれあったりしながら、同時にネット経由で見えない誰かとコミュニケーションをとることもできる。ここでもヒットの鍵を握るのは若者たちだ。

総務省のネット利用項目別調査によると、10代と20代は他の世代に比べ、SNSと動画サイトを使う割合が圧倒的に高い。そこである記事や動画が瞬間的に注目を集める「バズ」と呼ばれる現象が起きると、話題は一気に広がっていく。

そんなネットの特性を生かし、常識を破る形でメジャーデビューした音楽家もいる。

シンガー・ソングライターの岡崎体育さん（27）は、友人と6万円で手作りしたデビュー曲のビデオが、まずユーチューブで注目された。自らもツイッターで宣伝につとめた結果、無名の新人の初アルバムがオリコンチャート9位を記録した。ライブや楽曲提供で忙しくなった今も京都府内の実家に住み、パソコンで作曲・録音する。スーパーでのバイトも続けている。

■ITネイティブの力

一方で、米国のトランプ現象に象徴されるように、ネットの世界に対しては厳しい批判や懸念も向けられている。

SNSで気の合う人とばかり交流していると、いつのまにか考えや好みが同じ方向に流される。受け入れられる情報だけ集め、本当のことは見ようとしない。他者の言動を激しく攻撃する「炎上」は絶えず、虚実ないまぜの話があふれる――。

だが、ネットやIT抜きにはもはや社会は成り立たないし、時代の潮流も見通せない。

DeNAなどの情報サイトの虚偽・盗用問題を受けて、ネットメディア界では事実の確認など編集体制の強化にとりくむ動きが始まっている。

こうした自己改革をふくめ、新しい文化やビジネスを生みだし、根づかせていくには、生まれたときからネットや携帯電話のある世界で育ったITネイティブの若者の力が必要だ。そんな問題意識を持ち、講談社の編集者を経て作家エージェント会社「コルク」を起業した佐渡島庸平社長（37）は、採用を意識して年間1500人の学生に会う。「前例のない時代。圧倒的な情報量を前に戸惑っている人も多いが、そこから新たな仕組みをつくりだせる人材を探し、育てていきたい」

業務を効率化し、若手が自由に考える時間を確保してめざすのは、創作者とファンをネットで直接つなげ、作品をより広く世界に届けることだという。

■閉塞を破って

時代の波頭を受けて生きる若者は、いつの世も大変だった。

歌人石川啄木は1910（明治43）年、青年らを押しつぶすような当時の社会の様子を評論「時代閉塞（へいそく）の現状」に書いた。東京朝日新聞で校正係として働き、妻子と母を養っていたが、その2年後に26歳で死去。多くの優れた詩歌が残された。

生前、自らの望むようには小説や評論を出版できなかった啄木に対し、新成人はスマホひとつで、知らない人や世界に発信できる世界に生きている。つながる道具の力を、時に失敗もしながら、でも前向きに使ってゆこう。発見をもたらし、新しい文化をうみ、社会を豊かにする。そんな未来をスマホ世代の若者に見いだしたい。

社説 若者はいま 未来に希望持つために

毎日新聞 2017年1月9日

1人の大学生がアルバイトでこんな経験をした。仕事先は外食チェーンの調理場。調理法を覚える間もなく1人で店を任されてしまった。マニュアルを見ても分からない。

困り果ててネットで検索すると、質問に誰かが答えてくれる「Yahoo!知恵袋」に同じ質問が投稿されていた。自分のような立場の人がほかにもいたのだと知った。

学生アルバイトの実態を告発する本「ブラックバイト」に紹介されている話だ。この外食チェーンでは夏休みに連続で何日も深夜勤務をさせられる。長時間労働のせいで心を病む学生もいた。

奨学金制度の拡充を

しかし生活費が足りず、ブラックバイトと分かっても続けざるを得ない学生は多い。そんな企業では職場を統括する若い社員も忙しく、帰宅もままならない。店の駐車場にと

めた車で寝ることさえある。

アルバイトで過酷な労働を強いられ、就職しても酷使される。こうした企業は人手不足でも若者を人として扱わず人件費を徹底して削る。

経済苦の学生をどう支えるのか。その方法の一つである奨学金制度は明らかに貧弱だ。家庭の収入が減る一方、大学の授業料が高くなる中で、奨学金に頼る学生は多い。今や大学に通う2人に1人が利用しているといわれる。

卒業してもアルバイト生活が続いたり、非正規労働者だったりして収入が少なければ、奨学金の返済に行き詰まる。

国費で賄われている日本学生支援機構の奨学金を3カ月以上滞納した人は2014年度、約17万3000人に上った。

奨学金の返済が難しくなれば、最後は自己破産し、一から出直す方法がある。だが、多重債務問題に取り組んできた弁護士は「自己破産できればまだいい」と言う。若者からは「自分の代わりに親へ請求が来るのなら自己破産したくない」という相談が寄せられる。

低所得世帯の大学生に返済不要の「給付型奨学金」が18年度から提供されることになった。1学年あたり2万人規模で月2万～4万円を給付する。一歩前進ではあるが、まだまだ不十分だ。進学や就職をする際に、とくにハンディを負うのは児童養護施設の人たちだ。養護施設は全国に約600あり、18歳までの約3万人が暮らしている。

全国児童養護施設協議会によると、施設から大学や専門学校に進学する人は2割程度にとどまり、8割近い全国平均を大きく下回る。進学したくても諦めるケースは多い。

進学した場合でも、中退の割合は高いといわれる。学費や生活費の負担が重く、アルバイトと学業との両立が困難だからだ。

施設を出てアパートを探す時には親や親戚などの保証人が必要なため仕事の内容より、寮などがあることを優先して就職先を選ぶ。その結果、仕事が合わずに辞めてしまうことも多いという。

東京の社会福祉法人が運営する「アフターケア相談所ゆずりは」は施設の退所者を含めて年間約300人の相談を受けている。

担当職員は「生活が苦しくなり、住む場所もなくなってホームレスになったり、自殺したりする人もいる」と明かす。

避けたい格差の固定化

格差が拡大し、固定化されていく中で若者は将来の暮らしを描けず、社会そのものも不安定化していく。先の米大統領選を思い起こす。

米国もグローバル経済から置き去りにされた中間層の収入が減り、共働きでも子供を大学に通わせにくくなっている。子供たちは大学に行っても収入の多い仕事を見つけるのは難しい。多額の学費ローンを返済できない人も増えている。

かつての白人中間層の多くは変化を求め、過激な主張を繰り返すトランプ氏に投票したといわれる。

民主党の予備選では、公立大学の学費無償化を訴えたサンダース氏を若者が熱狂的に支持した。アメリカンドリームが色あせ、民意の分断も顕在化した。

欧州では高い失業率が続き、イタリア、フランスでは10%前後にもなる。とくに若者の失業率が平均の2倍を超える国も少なくない。

欧州で極右やポピュリズム（大衆迎合主義）勢力の主張が受け入れやすくなったのは、中間層以下の閉塞（へいそく）感や若者の高い失業率に起因する政治不信があるからといわれる。日本では失業率が3%台と低い、パートや非正規雇用が増えているのが大きな理由で、雇用が安定しているわけではない。

そんな中、学生の間ではブラックバイトを告発し、待遇を改善させる活動が広がる。企業に就職しないで起業する人も増えている。社会を変えようと、NPOの活動に生きがいを見つける若者もいる。

彼らが諦め、挑戦できない社会に未来はない。

きょうは成人の日。大人になることに希望を持てる国にするにはどうしたらいいのか。それは政治だけの問題ではない。

社説：成人の日 勇気を持って前へ踏み出そう 読売新聞 2017年01月09日

先行きが不透明な時代に、大人になった自分には何ができるのか。持ち味をどう生かしていくのか。晴れの日、思いを巡らせてほしい。

きょうは成人の日だ。1996年生まれの123万人が大人の仲間入りをした。古里での成人式で、旧交を温める人も多いだろう。

昨年4月の熊本地震で1500棟が全半壊した熊本県南阿蘇村では、今月3日に式典が開かれた。代表2人が「村で生まれ育った誇りを持って、社会に貢献したい」と、誓いの言葉を述べた。

その一人、介護福祉士の後藤亜優美さんは日々、村内の施設でお年寄りのケアに励む。「自分がやるべきことはここにこそある、と改めて思った」と意欲を語る。

社会のグローバル化が進む中、広い視野を持ち、世界を股にかけて活躍する人材は欠かせない。海外に目を向けない若者に対しては、「内向き志向」などと批判する声も少なくない。

しかし、身近なところにも、情熱を傾けられる大切なことが、数多くある。自分が選んだ仕事で、周りの人に喜んでもらう。その喜びの輪が大きくなって、社会の仕組みが変わることさえある。

学生時代、ITベンチャー企業の経営に携わった駒崎弘樹さんは、24歳の時に派遣型の病児保育という新サービスを始めた。

病気の子供を預ける施設がなく、職を失った、という知人の苦境を知り、社会の矛盾を強く感じた。それが、無縁だった保育業界に飛び込むきっかけとなった。

37歳の現在、政府の検討会議で育児や社会保障などに関する様々な提言を発している。

実体験を基に、地域活性化や子育て支援などのビジネスに挑む若者が増えている。心強い限りだ。若い力によるボトムアップ型の活動は、社会を元気にする。

3人組の音楽グループ「いきものがかり」が、活動休止を宣言した。神奈川県厚木市の路上ライブを振り出しにメジャーデビューしてから10年間、音楽を通して、若者だけでなく、子供や高齢者にも笑顔をもたらした。

出発点である地元のファンとの交歓にも力を注ぎ続けた。

いったん自由になる、との意味を込めて、活動休止を「放牧宣言」と表現した。休止の理由も「それぞれの未来をもっと広げるために」と前向きなものだ。

前に進めば、また新しい道が開ける。たとえ失敗しても、やり直しはきく。勇気を持って、一步を踏み出すことが大切だ。

【主張】成人の日 周りを思いやれる大人に 産経新聞 2017年1月9日

「成人の日」を迎えた20歳の皆さん、おめでとう。大人としての自覚と責任を胸に刻み、豊かな人生に向けて新たな一步を踏み出してほしい。

若い世代を取り巻くさまざまな困難な環境を考えると、祝意を込めて希望に満ちた話を申し上げるより、むしろ、どんなに努力しても自分の思うようにはならないことがたくさんあるのだと、厳しい現実を指摘しておいた方が新成人のためにはよいのかもしれない。

夢を持つな、希望を捨てろというのではない。どうせ無理だと端（はな）から投げ出したのでは、豊かな人生は決して手に入らない。夢や希望を大切にしつつ、同時に、なかなか思うにまかせない世間の冷厳な一面を知ること、大人には欠かせぬ要件の一つである。

評論家の福田恆存は、幸福論は本来、幸福を獲得する法でなく、不幸に耐える術を伝授するものだと言ったが、苦境に陥ったときにこそ大人の真価は発揮されよう。世の不条理

を嘆くだけでは何も始まらない。現実をしっかりと踏まえた次の一手を探ることが大人の分別というものに違いない。

酸いも甘いも噛（か）み分けた处世法とはきっと、こうして身についてゆくのだろう。

大人の要件をいま一つ加えれば、家族ら周りの人々の支えに甘えてきた子供の頃とは違って、有縁無縁の力に感謝し、これからは周りを支える立場になるのだと決意を新たにすることである。

昨年の成人の日（1月11日）の「主張」では、震災直後の混乱のさなかに産声をあげた人もいようかと書き、これまでの成長を支えてくれた人々にまず、感謝の思いをと呼びかけた。新成人の大半が阪神・淡路大震災の起きた平成7年の生まれだった。

いま開催中の大相撲初場所でも新十両に昇進した照強（てるつよし）も震災当日の1月17日、震源地に近い兵庫県洲本市の病院で生まれている。

「復興へ向けて神戸や関西の人が頑張ってきたので、自分も負けじと頑張りたい」「土俵を沸かせて、みんなが笑顔になるような相撲をとりたい」。照強の意気込みには周囲の人たちに寄せる思いが強く感じられる。168センチ、116キロの小兵力士は、人一倍稽古を積んできたという。今年の新成人もぜひ、多くの人々に思いを致せるような大人になってほしいと願っている。

社説：傍らを歩く人になる 成人の日に考える

中日新聞 2017年1月9日



成人おめでとうでございます。ずっと誰かに守られながら大人になった。だから今度は誰かの味方になってほしい。私たちも、あなたを見守り続けます。

名古屋を拠点に活動するタレントで書家の矢野きよ実さんは、3・11の震災直後から、被災地の子どもや大人に毛筆を握ってもらい、思いの丈を思ったままに書にしてもらい、「書きましょ」プロジェクトを続けています。

そんな矢野さんに、新成人へのメッセージをつづってほしいとお願いすると、快く引き受けてくれました。

一月二日の未明に起床。新年の作法にのっとり、朝一番の清冽（せいれつ）な水をすずりに取って姿勢を正し、気持ちを込めて墨をする。

六年前、震災の年の四月、すずりの名産地として知られる宮城県の旧雄勝町（石巻市）を訪れたとき、大津波にのまれたまちの瓦礫（がれき）の中から拾い上げ、譲ってもらった“きずな”のすずりです。

「ことし最初の一枚、文字通りの書き初めです」と矢野さんが届けてくれた贈る言葉は――。

去年の十月、矢野さんはいつものようにたくさんの筆と紙を携えて、福島市郊外の旧茂庭中学校へ出掛けていきました。おととしの秋にも訪れた場所でした。

廃校の校舎で開いた「書きましょ」プロジェクト。床の上に全紙サイズの紙を広げて、心の中に溜（た）まった言葉を吐き出してもらおうという試みです。

集まったのは市内の復興公営住宅で暮らす大人十人、DV（家庭内暴力）の被害に遭って支援センターに保護されている小、中、高校生約二十人。

ほとんどが、福島第一原発のある双葉町を事故で追われた人たちでした。

震災の年からすでに広がり始めたDVや“福島いじめ”に、矢野さんは心を痛めていたそうです。

今生きているということ

六十歳代後半とおぼしき女性は、じっくりと時間をかけて「慶子へ」と、いまだ行方不明のままの娘の名前をしたためました。

海辺で働いていたのでしょうか。「波に持って行かれたの、まだ出て来ないのよ」と、問

わず語りにつぶやく母。「これ、連れて帰ってええですか」と、自ら書いたその文字を、いとおしむように言いました。

エクアドルから移住したという小学校四年生の女の子。力強く「泣くな 笑え おまえは1人じゃない!!」と書きました。

大人が泣くと、子どもは笑う。泣けずに笑うー。そんな姿を矢野さんは何度目にしたことでしょう。前の年のことを思い出したのはその時でした。

二時間の作業の後半、思い思いの場所で思い思いに筆を走らせていたはずの子どもたち、六歳から十歳の子どもたち数人が、ほぼ同時に同じ言葉を書いた、そんな不思議な光景を。

「自分で守る」「命を守る」「私が守る」「天国へ行ってもぜったい見守る」…。何かを乗り越えようと書に向かう子どもたち。矢野さんには、贈りたい言葉がありました。

そこで新成人の皆さんに、お願いがあるのです。

第一に、今生きているというキセキのような現実を思い切り味わっていただきたい。

生きて、成長し、成人のこの日をつつがなく迎えられるということは、ただそれだけで祝う値打ちがあるのだと。

次に、被災地のこと、ふるさとに帰れない人のこと、忘れないでいてほしい。

東北や熊本の被災地に、福島に、思いを寄せるということは、この国の、つまり、自分自身の未来について考えるということなのだから。

時には“月の人”になる

そして最後に、傍らで涙をこらえている人に「大丈夫」と言える大人になってほしい。

キセキを起こせなくていい。戦う必要なんてない。傷んだ人や悩める人のそばにいて、「大丈夫だよ」と、小声でひと言ささやくだけでも構わない。

「大丈夫」と「大人」。何となく見かけも似ていませんか。

もちろん、太陽のように自ら輝いてももらいたい。だが時に、傍らで静かに夜道を照らす、“月の人”にもなってほしいー。

「いつも 味方だよ」＝写真

矢野さんの、皆さんに贈る言葉です。そして皆さんの方からも、傍らの誰かにそっと、届けてほしい一言です。

社説：成人年齢／「大人」のリスクも知ろう

神戸新聞 2017年1月9日

「大人」の定義を変える議論が国会で始まろうとしている。政府は、成人年齢を18歳に引き下げる民法改正案を、早ければ20日召集の通常国会に提出する方針だ。成立すれば、民法が制定された明治時代以来の変更となる。

2015年6月、選挙権年齢を18歳以上にする改正公選法が成立し、付則で「民法と少年法について法的措置を講じる」と明記された。これを受けて自民党は、できる限り速やかに成人年齢を引き下げるべきだとの提言をまとめた。

早い段階で若者に責任感を持たせ、社会を担う大人としての自覚を促そうとする考えだ。国際的にも18歳以上を成人とする国が多い。

一方で、影響を受ける法律は少年法だけでなく飲酒や喫煙、公営ギャンブルの解禁など多岐にわたる。親の同意なしにローンなどの契約ができるようにもなる。

それぞれの法律に、社会経験の浅い若者の保護や、立ち直りを支援する目的がある。18歳選挙権の導入とは別に、その立法趣旨は尊重しなければならない。対象年齢を一律に引き下げるような乱暴な議論は避けるべきだ。

法務省の意見公募（パブリックコメント）には日弁連や全国高等学校長会などから計194件が寄せられ、慎重意見が多数を占めた。特に多いのは、若者の消費者被害拡大への懸念だ。現行法では親が無条件で解約できるなどの規定で守られている18、19歳が、悪質商法の標的にされる恐れは十分ある。

少年法の適用年齢については「18歳で参政権を得るのに、罪を犯しても保護されるの

はバランスを欠く」などと引き下げに賛成する意見と、「立ち直りの可能性を重視すべきだ」との慎重論に分かれている。法務省が昨年まとめた勉強会の報告書も両論併記にとどまった。

いずれも、国民的なコンセンサスは得られていない。法制審議会は09年、成人年齢引き下げの前提として「問題点の解決に資する施策の実現が必要だ」と答申した。法改正を急ぐ前に、問題点を分析し、十分な対策を講じる必要がある。

成人と認められると、どんなリスクと責任を背負うのか。大人のボーダーラインにある若者たちが自ら学ぶ場として、小中高校での消費者教育の強化なども急務といえる。

【成人の日】より良い社会目指そう

高知新聞 2017年1月8日

あす9日は成人の日。全国で123万人、高知県では6660人が大人の仲間入りをする。

年明けから県内各市町村で順次、式典が行われている。華やかな晴れ着や真新しいスーツに身を包んで式に臨み、同級生と共に決意を新たにしたい人もいよう。

まずは皆さんの門出を心から祝福したい。

昨年、選挙権年齢が18歳に引き下げられた。有権者であることを自覚し、国や地域の将来についてじっくり考え、1票を投じる行為は社会参加といえる。投票を済ませ、18歳で大人になった気分を味わった人もいのではないかな。

政府は民法改正案を提出し、成人年齢も18歳に引き下げる方針ともいわれる。世界では18歳の方が主流でもあり、日本も成人年齢が変わる可能性はある。

20歳でも18歳でも、前途は明るく限りない可能性がある—そんな世の中が新成人にとって理想だろうし、本来そうあるべきだ。ところが現実には厳しい。

とりわけ気掛かりなのは、若い人々が労働現場で理不尽な扱いを受けていることだ。

広告業界最大手、電通の女性社員の問題が尾を引く中で、昨年暮れには高知大の学生アルバイトの厳しい実態が、アンケート結果から明らかになった。

暴力や暴言、あるいは希望していない日時の勤務を強制されたり、割った皿の代金を弁償させられたりしたとの答えもあった。お金を稼ぐため耐えている様子を想像して、胸が痛くなった。

忙しいのなら助け合うべきだ。それなのに、仕事に追われ余裕をなくし、職場はとげとげしい雰囲気となる。たまったストレスを立場の弱い者に向けているのだろう。

そんな悪循環に陥っている職場が今はよくあるとも聞く。過酷な勤務を強いる企業を指す「ブラック」という言葉は、残念なことに頻繁に見聞きするようになった。弱い者を虐げるのは、子どものいじめと変わらない。

誰でも、家族や友人にとってはかけがえのない存在である。だから一人一人が互いを尊重し合う必要がある。それが気持ち良く働ける職場へと結び付こう。

既に働いている新成人の中には、世間の荒波にもまれている人がいるのではないかな。

今は在学中の人も、数年後には大半が就職するはずだ。もし職場で不当な扱いを受けることがあれば、一歩踏み出して声を上げ、改善する道を探してほしい。行政などに相談する必要が出てくるかもしれない。困ったり悩んだりしている人には、手を差し伸べてほしい。

大人になれば、職場や地域などさまざまな集団を構成する一員として責任と自覚が必要になる。年長世代の私たちは、種々の問題を抱えながら新成人を迎える点を反省し、一緒により良い社会を目指したい。

